

# 2 年 学 年 通 信 (道 徳)

海南市立東海南中学校  
R1.10.04 No. 15



## 『田老の生徒が伝えたもの』

2011年3月11日、東日本大震災で発生した津波は、三陸沿岸に位置する田老にも大きな爪痕を残しました。しかし、緊急事態の中、田老第一中学校の校庭に避難していた生徒、教職員、保育園児、地域住民らは的確な判断、主体的な行動により、全員無事に津波から逃げることができました。そこには、マニュアルにのっとり繰り返し行われた避難訓練と、さらに田老第一中学校の生徒が見せたたくましい行動力、その強さと優しさがあったのです。

田老の中学生たちはとてもたくましく、やさしく、頼もしいと思った。もし、こういうことがあったら自分もお年寄りの手を引っ張って避難したりしたいと思った。	自分が危険な状況の中でも地域の人々のことを考え全員で助かるという田老の人々の考えはすばらしいと思った。私も自分の地域について良く知り、冷静に判断していきたい。	もしものことがあった場合、冷静な判断力、地域のことをよく知っておくということが大切だと思った。いざというときの緊急の対応ができるようになったらいいと思う。	自分たちは避難するときに他人を助けられるのか不安だけれど何かあったら助けてあげたいと思う。何かあった時、じっくり判断できるようにしたい。
地震が来て、津波が来て、マニュアル通りにいかない場合もあるので避難経路を複数考えておきたいと思った。	いざとした時に瞬時に判断ができるようになりたいと思いました。その判断がまだ合っているようにしっかりと自分を持っておきたいと思いました。	津波や地震が起きたとき冷静になって判断することが大切だ。避難訓練があるときに一生懸命したい。もしもを考えて行動しないといけない。自分がこの立場になったら行動したい。	地震はいつくるかわからないので家族と避難ルートなどをもう一度話してみたいと思った。自分のことだけでなく他の人のことも救うのはすごいと思った。しっかりと訓練しておきたい。
私ももしもの時に備えたい。そして急いでいて焦っている時も人助けをしたい。強く、自分の意志を持って、一番よい判断をした。	中学生が中心となって避難したのは頼もしいと思った。日頃から地域のことをよく知り、こういう時ほど冷静な判断が必要だと思った。	いつ、どこで、どんな災害が待っているかなんて誰にもわからない。どんなときも仲間と共に支え合い、災害を乗り越えたい。	自分は人に話しかけるのは恥ずかしいので声を掛けづらい。でももし困っていたら声をかけていきたいと思う。多くの避難ルートを知っておかなくてはいいなと分かった。
私はもし津波が来たら自分だけ逃げるのではなく、周りの人やお年寄りの方を助けたいと思う。自分も同じ立場になったらのことを考えて避難ルートを調べようと思う。	私たちが避難訓練を何回もするけどそのときその通りにしか動かない。でも震災は予想を超えることもある。その時に自分が的確な方法をとれるかが大事だと分かった。	いつ、何があるかわからない。そんな時に冷静にベストな判断をつくすということに素晴らしいと感じた。自分も人のために助けることや救うことができればいいと思う。	判断・たくましさ・気配り・冷静・たのもしさ、この5つが大切だと思う。経験と勇気を生かした田老の人々はすごいと思った。私も頑張って「命」を自分も周りの人も助けたいと思った。
いつ、災害が起こるかわからない今、悩んだりする時間はない。冷静な判断力と行動力、周りを見る目が大切だと思った。この中学生のように人を助けようとする姿勢を大切にしたいと思った。	地震が起きてから考えるのではなく、日頃からどうするかを考えておくことが大切だと思った。避難訓練、避難経路の確認の大切さを感じた。人を助けるのは大変だがすばらしい事だと思った。	私は実際こんな状況になったらこうして動くことはできない。でも動けるようになりたい。自分だけが救われるのではなく、自分以外の誰かを救えるようになりたいと強く思った。	この町にもいつかは地震がくる。「もしも」をいつも考えて行動することが大切だと分かった。どんなときでも冷静に落ち着いて判断したい。

震災時、中3だった田老一中の生徒の作文とその後の作文があったので紹介します。

## 「命てんでんこ」

僕は思う。あの日の体験をこれから生きていく人々に伝えたい。  
三月十一日、二時四十六分、大きな地震が東日本を襲った。僕たちは体育館で卒業式の練習をしていた。先生の声で校庭に出た。校庭はまるでゼリ一のように波打ち、泣き出す人もいた。みんなで励まし合いながら恐怖に耐えていた。そして「逃げろ」という声が出て、何がなんだかわからないまま、僕たちは裏山に登った。津波はものすごい速さで町を飲み込み、さっきまでの町並みを一瞬でがれきに変えてしまった。声も何も出なかった。ただこわくて体が震えた。津波を目の前で見て、何もできない僕たちはおろおろするだけだった。

その日は、全校生徒が田老総合事務所まで一夜を明かした。消防団の父さんに、夜十一時頃に会えてとても安心したが、寝るにも寝られない夜だった。夜が明け、外を見ると、がれきの上に雪が積もっていた。昔から津波の次の日には雪が降るといふ言い伝えがあるらしい。言い伝えのとおりすぎて驚いた。そして、がれきの上の雪は僕たちをますます悲しくさせた。明るくなるにつれて、家の人がやってきて、みんな家へと帰って行った。家の人が会いに来るたびに、涙を流す仲間姿を見送った。

三日目、千徳の祖父の家に行った。電気も水もガスも復旧していて、その違いに驚いた。でも僕はなんだか落ち着かず、じっとしていられた。父さんと一緒に消防団の仕事を手伝いたいと言った。生きている人がいるかもしれない、一生懸命にがれきの中を父さんと歩いた。

僕はがれきの中を歩きながら思ったことが二つある。一つは「命てんでんこ」という言葉の深い意味。命より大切なものはありません。どんなことがあっても逃げることを考えてください。命があればどうにでもなります。未来に向かって歩かせます。

もう一つは、負けたくないと思ったことです。田老は今まで何度も津波の被害にあり、それを乗り越えてきた町です。校歌の三番には田老一中生の進むべき道が示してあります。

防浪堤を仰ぎ見よ  
試練の津波幾たびぞ  
乗り越え立てし 我が郷土  
父祖の偉業や 跡継がん

僕はあの日のことをたくさんの人に伝えたい。命を大切にしようと思えたい。そして、決してあきらめず僕らの未来を作りたい。



## ② 「命てんでんこ」

「てんでんこ」とは、「それぞれに」「めいめいに」を意味する方言です。過去の経験から、「命てんでんこ」の基本は「自分の命は自分で守る」という「自助」の教えとして伝えられてきました。共倒れを防止し、1人でも多くの命を救うための究極の知恵であり、非情な教えとして解釈されてきました。しかし、この知恵には実はたくさんの意味が込められています。「命てんでんこ」は「自分だけが助かればいい」という意味ではありません。自分が逃げるにより、他人も逃げる。「逃げる」知恵であると同時に「逃がす」知恵でもあるのです。



## 震災から6年、「命てんでんこ」を地元外の人にも伝えていきたい

私は、東日本大震災津波を経験して、人の命を助ける仕事に就きたいという希望をかなえて、現在、宮古消防署に勤めています。消防士は、生きるか死ぬかの狭間である現場に立ち会う機会も多く、改めて命の大切さを実感しています。

地元へ伝わり、守り伝え続けてきた地元の知恵である「命てんでんこ」の教えを、これからもたくさんの人に伝えていきたいという気持ちは今も変わっていません。消防士になって終わりではなく、これからどう地元の役に立つかが問題だと思います。自然災害が起きたときに役に立てる消防士として、自分自身、成長していきたいと思っています。

参考：<http://iwate-archive.pref.iwate.jp/student/manabou/>